

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	嶋田 久美
論文題目	地域医療福祉と音楽活動——関係性の蘇生としての協働と創造		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、現在、治療やケアの一環として医療福祉の領域にさまざまな形で取り入れられている音楽活動の特性を、「協働性」という観点から明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>医療福祉にかかわる音楽活動は、従来、音楽療法の枠組みのなかで検証されてきた。現代の音楽療法は第二次世界大戦頃に誕生したが、当初は、音楽が人体に及ぼす生理的効果を科学実証的に解明する数量研究が主流であった。だが、1980年代を境に、それまでの科学実証主義への偏重に対する反省から、クライアント(患者・被支援者)が置かれた個々の社会的・文化的状況に即して療法の意義を捉え直そうとする質的研究の動きが活発化する。今世紀に入り、この見直しの動きは、「コミュニティ音楽療法」(Community Music Therapy、以下、CoMTと略記)の提唱へと結実する。CoMTとは、音楽療法の実践の場を病院や福祉施設などの閉ざされた空間から地域社会へと積極的に開こうとする考え方、ないしその考えに基づく実践の総称であり、欧州の音楽療法士らによる提唱を皮切りに議論が国際化した。</p> <p>CoMT提唱に至る背景には、昨今、各国の医療福祉政策で推し進められている地域医療やコミュニティ・ケアにみられる「コミュニティ」や「地域」という視点の重要性の高まりがある。とはいえ、CoMTでは、施設の外に実践の場を移すこと(音楽療法の「脱施設化」)が必ずしも主眼にあるわけではなく、問題とされるのは、従来の医学的な治療観のもとで役割や方法論が固定され膠着状態に陥っている環境と、「治療者－患者」ないしは「支援者－被支援者」という関係性をいかに見直していくかであり、音楽活動はそのような関係性の改善や再生のための媒介となりうる。そこから浮上するのは、被支援者一人だけでなく、その人を取り巻く人間関係のネットワーク全体に動きをもたらさしめる音楽活動の可能性である。それは、従来の医学モデルに基づく音楽療法の域を超えており、支援者－被支援者という二項では語れない協働性を呈している。本論文のねらいは、このような支援関係のネットワークに働きかける音楽活動の協働性と創造性の諸相を明らかにしていくことにある。</p> <p>本論文は、序と結を含む全八章からなる。上記を概観する序に続き、第一章では、CoMT提唱者らがコミュニティという観点を打ち出すことで、従来の音楽療法のあり方をいかに乗り越えようとしているのかが明らかにされる。CoMTの特徴のひとつは、個人をミクロからメゾ、マクロへと幅広い次元から捉える生態学的視点にある。音楽活動は個人と地域社会との紐帯を生み出すための媒介として機能し、ゆえに音楽活動への参加は社会包摂の手段とみなされる。ただし、CoMTでは文化的他者といかに対峙するかとい</p>			

う問題について看過されているため、近年の社会包摂／排除論を参照しながら、文化的他者と音楽活動を行ううえでの課題がさらに検討される。

第二章では、従来の音楽療法における「セラピストとクライアント」という医療的な二者関係モデルにどのような問題があるのかが、音楽療法士の音楽聴取の諸技法と方法論を横断的に分析することで明らかにされる。従来の個人主義に基づく音楽聴取の仕方には、人間の内面性と音乐的パラメータを関連づけることによって療法的効果を同定するという表現病理学的な還元主義と、音楽現象を採譜可能な記号とみなすテキスト還元主義が確認される。それらの問題点は、音楽表現の解釈が特定の美的規範のもとでの基本形とその逸脱という見方に収れんしてしまうことにあることが指摘される。

第三章では、WHOによる国際生活機能分類（ICF）と障害学における「障害の社会モデル」が示唆する「環境」と音楽実践がどのように結びつくのかが、NPO「ミュージック&メモリー」（M&M）の活動をめぐる議論を手がかりに検討される。M&Mの特徴は、施設という空間を構成する諸関係に複層的に介入するソーシャルワーク的なネットワーク形成にある。その点を踏まえ、CoMT提唱者らによる「修復的ミュージッキング」という概念の射程が、損なわれた個人の音楽性の回復だけでなく、関係性のネットワーク全体に及ぶものとして捉え直される。

第四章では、「脱施設化」を指すことが多いde-institutionalizationという言葉の射程を「脱制度化」という観点にまで広げ、施設臨床における音楽活動の課題が検討される。アーヴィング・ゴフマンが問題化した「全制的施設」という空間化の論理を解除する働きと、ティア・デノーラによる「音楽アサイラム」という概念が示唆する、空間に働く関係性を取り除くことと新たに作り直すことの両方の働きの重要性が示される。

第五章では、「神戸音遊びの会」が取り上げられ、この会がいかに旧来の音楽観・障害観・福祉観を乗り越えようとしているのかが、会の目的や仕組み、背景にある思想を紐解くことで明らかにされる。とくに、外部から招へいされるアーティストや観客といった「第三項」を巧みに取り込むことで、「関係性の摩擦」を検証することの自由をいかに担保するかが、従来の固定的な役割関係を社会に開くうえでの重要な糸口となっていることが示される。

第六章では、前章からひき続き、「音遊びの会」を例として、「関係性の摩擦」を含み込む音楽的集合性の倫理的・美的次元について、ニコラ・ブリオーの「関係性の美学」と、それに関連するフェリックス・ガタリ、およびジル・ドゥルーズによる「装置」概念を補助線としながら考察される。そのうえで、会の独自性として、人と物を介して協働的に音楽表現を見立てていくプロセスにおいて、各々の参加者が有する歴史性が拮抗し合うことで生まれる力が相互変容的な創造性につながっていることが示される。

以上の考察を踏まえたうえで、全体の結びとして、医療福祉にかかわる音楽活動の可能性が「関係性の蘇生」の機能に見出され、それが他者の本質化に抗う「戦術的なブリコラージュの力」として総括される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、近年国際的な広がりを見せている「コミュニティ音楽療法」の潮流を軸として、昨今の「地域指向」の医療福祉現場における音楽活動の機能について、「協働性」の観点から検討したものである。CoMTは、上記の医療システム転換に呼応する形で、従来の「治療者 - 患者」という医療的な二者関係をより広い文脈に開くものとして提唱され、各地で実践されている。

本論文において第一に評価されるのは、日本ではいまだよく知られていないこのCoMTの活動にかんして、批判的検討および問題提起を行っている点である。著者によれば、CoMTそのものは現代における医療行為と芸術活動の関係を考えるうえで重要な参照項であるが、現状のCoMTにおいては、いくつかの本質的な問題が棚上げにされているのもまた事実であるという。すなわち、この実践をめぐっては、より深く検討されるべき余地が少なからず残っているというのだ。このうち、著者がおもに指摘するのは以下の三点である。

一点目は、CoMTが試みるように、療法の場を地域社会に開こうとしても、従来の医療的な二者関係モデルに基づいた音楽観や療法観は解消されるわけではないのではないか、という疑問である。個々のケースでは、「セラピスト - クライアント」あるいは「支援者 - 被支援者」という非対称的な二者関係そのものなくなるわけではない。したがって、従来の医療的な二者関係モデルに準拠することの何が問題なのかを明らかにする必要がある。

二点目は、とくに日本の精神科医療において、CoMTがどのように実践可能であるのか、いまだ明らかではないという点である。地域移行の実態は、国や地域によって異なり、イタリアのように精神科病院を全廃した国もあれば、日本のように病院を拠点に地域医療を展開している国もある。すなわち、施設と地域社会の関係性は国や地域によって異なるにもかかわらず、そのような地域差を踏まえたCoMTの議論はいまだ十分に進んでいない。したがって、CoMTは施設入院が主流の状況にいかなる布石を投じうるのか、その展開可能性を日本の文脈に即して模索する必要がある。

三点目は、脱医療化・脱医学モデルに向かう地域活動をいかに価値づけていくかという問題である。たとえば、本論文でも取り上げられた「神戸音遊びの会」のように、「音楽療法」という枠組み自体を問い直す活動もでてきている。その際、音楽の特異性の問題があらためて浮上する。たとえば、絵画活動では、往々にして、その活動の結果として生まれる作品が創造のプロセスよりも焦点化される傾向があるのに対し、音楽活動において看過できないのは、音楽を生み出すプロセス、つまり「共演する」という営みそのものがつねにさまざまな「関係性の摩擦」にさらされているということである。したがって、そのような場で生まれる音楽表現の個人レベルを超えた協働性や社会性の成り立ちについて考察することが重要になってくる。

本論文は、以上三つの主要な問題意識から出発して、CoMTの重要性を認めつつも、それを無批判に受け入れるのではなく、逆にいくつかの批判的観点に照らすこと

によってその可能性の領域をはかろうとする、あるいはそれを押し広げようとするものであり、この点において、まずはCoMT研究として大きな価値を有する。

また、このCoMT批判の文脈でなされる「神戸音遊びの会」の検討は、最終的には医療福祉の枠組みにもとどまらない、広く「政治的」とも呼びうる次元における社会的協働の可能性についても示唆することになる。この、たんなるCoMT研究あるいは音楽療法研究に収まらない、芸術と社会の関係そのものを問い直すような射程の広さにおいても、本論文には特筆すべきところがある。

一方で、いくつかの難点を指摘せざるをえない箇所もある。たとえば、内容上避けがたい面があるとはいえ、本論文には、ややもすると理論的な水準と実践的な水準とが曖昧な仕方で結びつけられる傾向が目につくし、あるいは従来の音楽療法に対するいささか一面的な批判も見受けられる。また、構成上の問題もあり、論文全体を貫く主張がやや把握しづらいうらみもある。これらは、著者の今後の研究活動も含めて、解決すべき課題として残りはするものの、しかしながらその総体的な成果を考慮するならば、本論文にとって決定的な瑕疵とまではいえないものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降